

「平成28年11月22日福島県沖を震源とする地震・津波」に関する自治会アンケート調査結果

1 アンケートの概要

(1) 目的

沿岸地区等における避難行動などを把握し、今後の津波防災対策に活用するために実施した。

(2) 調査期間

平成28年12月1日～12月7日

(3) 調査対象

沿岸域等の自治会（震災時の浸水域含む） 127自治会

※ 上記自治会の会長が把握している範囲で回答を依頼した。

(4) 回答数

98自治会（回答率：77%）

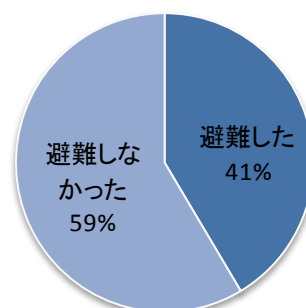
2 調査結果

(1) 地区の避難行動

問1 地区の方は、概ね津波から避難しましたか。（単数回答）避難した場合は避難者数

津波避難の有無

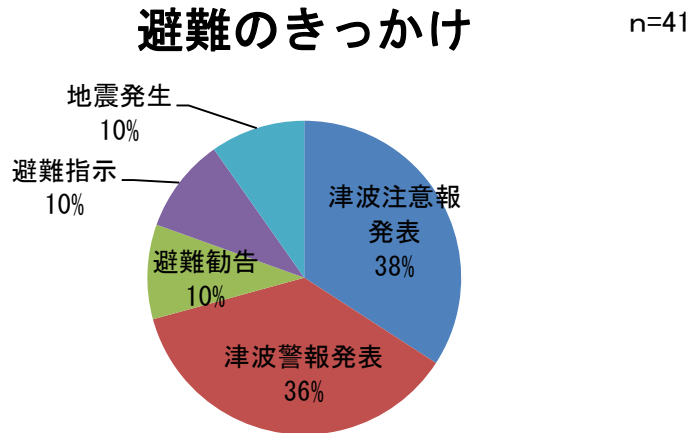
N=94



- ・津波からの避難の有無は、「避難した」が4割（41%）、「避難しなかった」が6割（59%）であった。
- ・「避難した」人数の合計は、約1,056人であった。

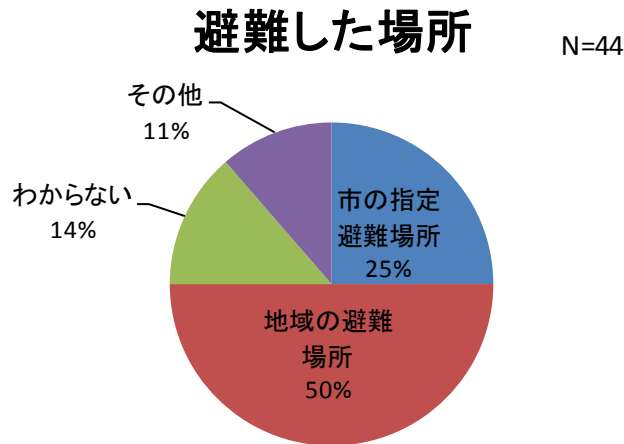
(2) 避難した方の行動（問1で「避難した」を選択した方）

問2 避難を開始した主なきっかけになったものは何ですか。（単数回答）



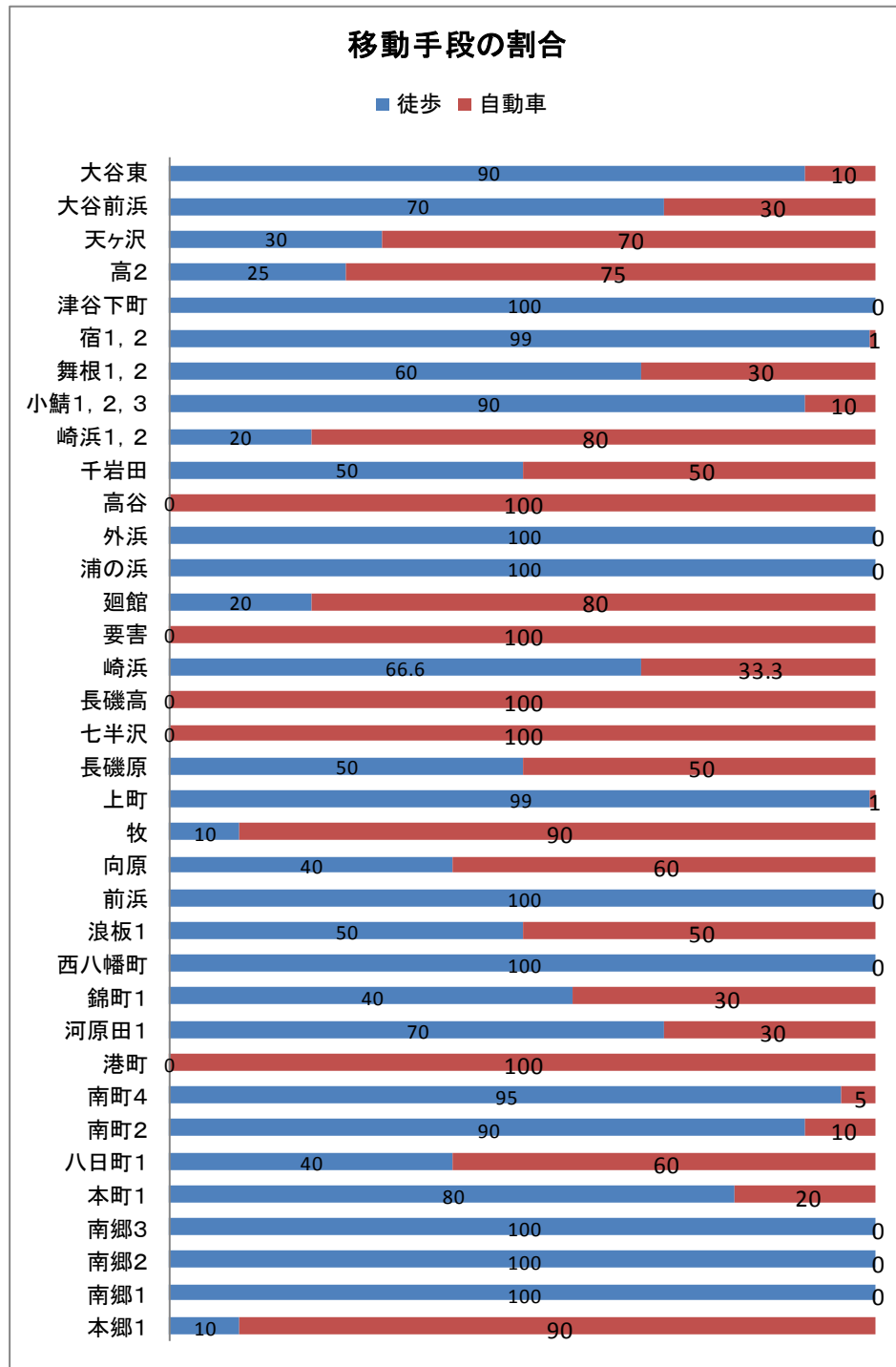
- 避難を開始した主なきっかけとなったものは、「津波注意報発表」が4割弱（38%）、「津波警報発表」が4割弱（36%）、避難勧告、避難指示、地震発生がそれぞれ1割（10%）であった。

問3 避難した場所はどこですか。（複数回答）



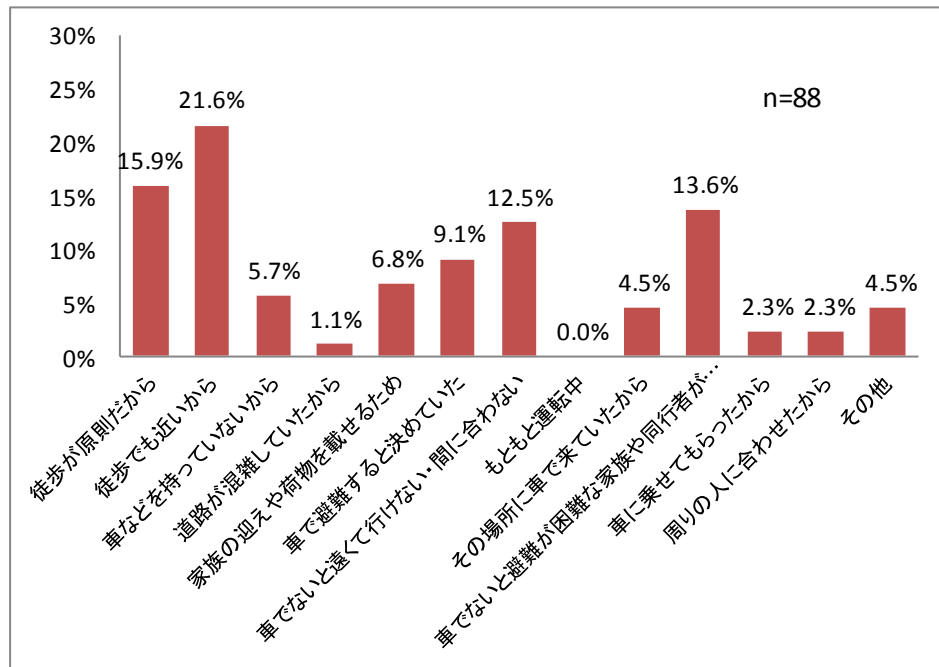
- 避難した場所は、「地域の避難場所」が5割（50%）、「市の指定避難場所」が3割弱（25%）、「わからない」が1割強（14%）、「その他」が1割（11%）であった。
- 「その他」としては、親戚の家、訓練の際の避難場所などの回答があった。

問4 移動手段で徒歩と車の割合は、どうでしたか。



- 徒歩で避難した割合が高い地区が多かった。
- 自動車による避難では、100%自動車による避難の地区も見られた。
- 地区によってばらつきがあるが、近くに高台や津波避難ビルなどがある地区は徒歩の割合が高い。

問5 移動手段の理由としては何が考えられますか。（複数回答）



- 徒歩を選んだ理由は、「徒歩でも近い」が2割（21.6%）、「徒歩が原則だから」が2割弱（15.9%）となっている。
- 一方、自動車を選んだ理由は、「車までないと遠くて行けない・間に合わない」が1割（12.5%）となっている。

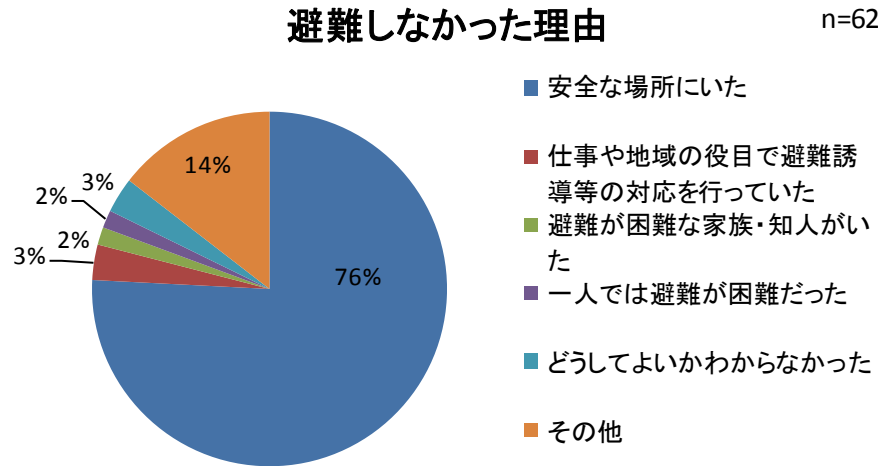
問6 避難途中の状況は、どうでしたか。（複数回答）

| | |
|--------------------------------|---|
| 人と車が混在して危険だった | 2 |
| 車が渋滞していた | 2 |
| 車を乗り捨てようと思ったが場所がなかった | 1 |
| 車で避難場所へ向かう道がわかりにくかった | 1 |
| どこへ避難したらよいかわからなかった | 1 |
| その他（避難がスムーズ、交通量が少ない、渋滞がなかったなど） | 9 |

- 「その他」で、「避難がスムーズ」、「渋滞がなかった」、「交通量が少ない」など、避難が円滑に行われたことが伺われる状況が多かった。
- 一方、渋滞の発生が2件あり、階上地区で国道45号を通行止めにしたことによるものであった。

(3) 避難しなかった方の理由（問1で「避難しなかった」を選択した方）

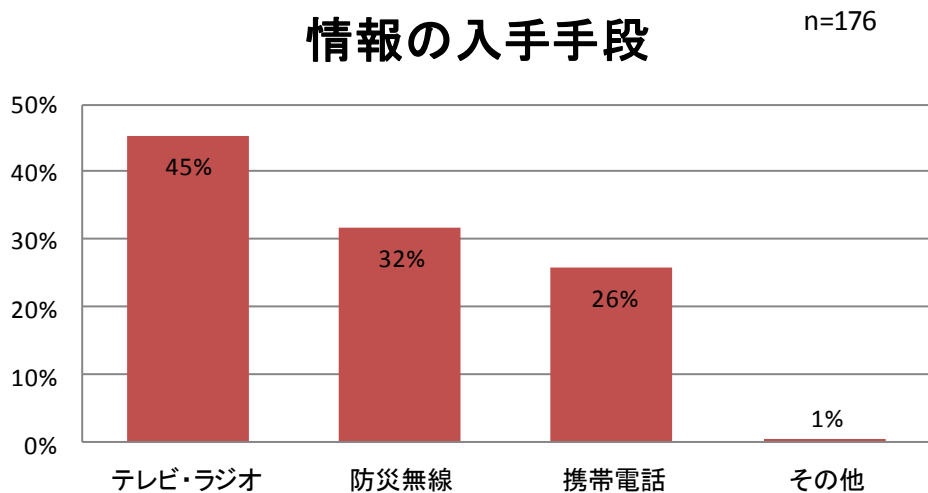
問7 避難しなかった理由は何ですか。（複数回答）



- 避難しなかった理由は、「安全な場所にいた」ためが8割弱（76%）であった。
- 「その他」が2割弱（14%）で、テレビのニュースなどの情報や過去の経験から、自分が住んでいる場所まで津波が来ないと判断したなどの理由であった。

(4) 津波注意報等の情報入手に関すること

問8 津波に関する情報は何かから入手しましたか。（複数回答）



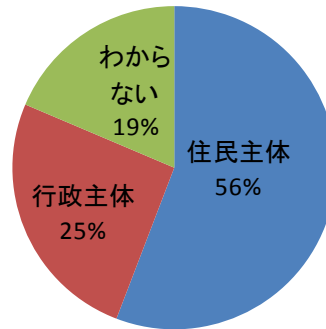
- 津波の情報入手方法は、テレビ・ラジオが45%で最も多かった。
- 次いで、「防災無線」32%、「携帯電話」26%となっている。
- 「その他」は、消防団による呼びかけとなっている。

(5) 避難所に関すること

問9 避難所の運営方法について伺います。(単数回答)

n=43

避難所の運営



- ・住民主体の運営が5割強(56%)、行政主体の運営が3割弱(25%)となっている。

問10 避難所の開設時間と開設時の避難者数について伺います。(単数回答)

| 開設時間帯 | 自治会数 |
|--------------|------|
| 地震発生～津波注意報発表 | 1 |
| 津波注意報発表～ | 18 |
| 津波警報～ | 8 |
| 不明 | 4 |

(単位:人)

| | |
|------|-----|
| 避難者数 | 523 |
|------|-----|

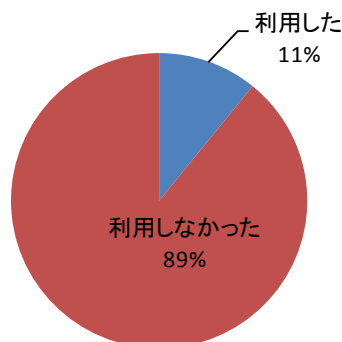
【福島県沖を震源とする地震・津波における警報等の発表時間】

| | |
|-----------|-------|
| 地震発生 | 5:59 |
| 津波注意報発表 | 6:02 |
| 津波警報発表 | 8:09 |
| 津波注意報発表切替 | 9:46 |
| 津波注意報解除 | 12:50 |

問11 備蓄物資の利用状況について伺います。(単数回答)

備蓄物資利用状況

N=46



(6) 地区内の事業所等の避難状況

問 12 地区内の事業所内の避難状況について伺います。(自由記述)

① 避難していた

■ 気仙沼地区

- ・建設業者が南郷コミュニティセンターに18人くらい避難した。
- ・地区内の瀬戸物屋で1人、小学校へ車で避難した。
- ・南町工事関係者4人、復興商店街1軒3人。
- ・事業所で高台に30人くらい避難していた。
- ・建設業者が、市指定避難場所(気仙沼中)に4人避難した。各企業の社員は避難解除が出るまで自宅待機させ午後から仕事を始めた。

■ 鹿折地区

- ・鹿折駅前高台30人くらい、駅には40人くらい。

■ 松岩地区

- ・工事関係者は八幡神社の境内、駐車場等に避難していた。

■ 階上地区

- ・地区内工事現場作業員等34人、自治会員の漁業従事者(海上)8人、計42人
- ・スーパーの20人くらい、地元工場30人くらい
- ・復興復旧工事の事業所(職員・作業員)が車で避難してきた。
- ・地元工場30、復興工事関係者20、水産事業者30、住民28人。
- ・当地区の避難者が今後のためにと子供たちに教えておく意味合いで階上中学校へ避難したと聞き、私も地域内を巡回後、階上中体育館の様子を見に行っただ。帰りスーパーに行っただが、スーパー量販店ともに閉店状態だっただ。津波警報解除まで自宅待機かと思う。

■ 大島地区

- ・建設事業者の職員・作業員約20人が高台にある宿舎に避難した。

■ 中井地区

- ・漁港防潮堤工事業者の方々は海岸から離れ、高台で状況を見守っていた。地元沿岸漁業者の方たちも海から離れた場所で見っていた。

■ 唐桑地区

- ・カキ養殖作業中の漁民が集会所へ10名程度避難した。
- ・商工会の方が2名ほど公民館に避難していた。

■ 小原木地区

- ・水産関係者の車両の避難15台くらい高いところへ移動する。

■ 大谷地区

- ・橋梁工事をしていっただが、警報が発表されてから作業を中止し、安全な現場事務所で休み、警報が解除されてから作業を行っただ。

② 避難していない

■気仙沼地区

- ・各事業所は午前中休業していた。
- ・通常通り営業していたようだ。
- ・当地区は誰も避難しない。震度も軽い。
- ・安全な場所に事業所があるので避難しなかった。
- ・事業所がなく、商店等は高台にあり避難しなかった。
- ・事業所が多いが出勤前だったので避難の必要がなかった。

■鹿折地区

- ・早朝だったので避難者なし。

■階上地区

- ・事業所での避難者なし。自宅待機で状況を判断指示のため。

■大島地区

- ・早朝だったため避難者なし。

■津谷地区

- ・各事業所は午前中休業していた。
- ・水産加工場が当日休みにした。

(7) その他

問 13 その他、お気づきの点についてご自由に記入ください。(自由記述)

① 地区の避難状況関係

■気仙沼地区

- ・見える範囲での交通量は通常と変わりなく見えた。屋外に出て不安そうにしていたり、徒歩で避難する人の姿は見られなかった。今回は避難しなかったが、用事などで海岸部にいれば話は別である。
- ・地元の震度の割には、騒ぎすぎだと感じた。用心に越したことはないが。
- ・避難しなくても今いる場所が安全と思われた。
- ・市の広報配布数は5世帯で、実際に住んでいるのは4世帯。2世帯は高台、1世帯は3階、残りの1世帯は震災後に盛土し新築、それぞれ少しの津波ではと思っているようだ。指導しているが。
- ・当地区は概ね住民が浸水域から高台に住んでいるため、津波の場合無理に避難しなくてよい。
- ・避難場所まで枝道が多くそれぞれ避難したようだ。車が通れない道のため徒歩での行動。消防署員の声掛けもあり助かった。
- ・住民が住んでいない。

■鹿折地区

- ・震度3くらいで津波がこないと思い避難しなかった。テレビ、ラジオで60センチくらいだと大丈夫と思い避難しなかった。
- ・地理的に安全な場所である。
- ・まずは身の安全を考える避難。当地区はそれをモットーに3か所の避難場所に常に訓練を通して実施している。状況を見ながら2次避難、3次避難と策を講じるように指導している。
- ・震災以降、低地の家屋が少なく、避難者はいなかった。

■松岩地区

- ・当地域は、震災以降、低地の家屋が少なく避難者はなかったようだ。
- ・東日本大震災の被害が甚大で既に危険と思われる区域に住民は住んでいない。高台等への移転もだいぶ進み、緊急的に避難を要するところはほとんどない。ただ要介護者への連絡確認は行っている。
- ・自治会役員3人が避難所の自治会館で正午前まで待機したが、避難者はいなかった。自治会館に行く前に川沿いの高齢者宅に避難を声掛けした。唐桑町内にいる家族が駆けつけるとのことで、2階で待機するよう呼びかけた。

■階上地区

- ・避難行動要支援者宅を訪問し、最初に避難させた。11月5日の避難訓練の成果がでた。津波注意報の時点では避難者は数人、警報発表により避難移動する人が多かった。全般的には自宅待機者が多かったと思われる。海の様子を見に行く人はいなかった。
- ・中学校体育館開門が6時10分にしてもらって助かった。寒かったのでストーブ4基稼働(7:00)、避難場所でマット、畳、避難者リスト受付等を行った。(教員10、住民10、避難者10が参加)
- ・防潮堤が未完成なのに国道45号の低い場所があるのに津波警報が出てからも閉鎖されていないのは。
- ・船の沖出しした方も多少いた。津波到達高さ1~3mの自己判断、テレビニュース、高台避難してください。連呼~津波注意報
- ・階上中学校の生徒・先生数人で体育館に避難者の受入態勢を整えていたのは、さすが階上中生と感じた。避難者リスト作成の用意もできていた。防災教育の実践校さすがである。階上中学校は自主的に開設したものと思う。

■大島地区

- ・避難指示が遅いような気がした。避難所近くのプロセキ宅に2世帯10人避難した。
- ・養殖漁業なので海から離れることをまず行動する。
- ・朝方だったこと、ライフライン無事、エリアメール、テレビ等から得る情報があり、比較的安心できたのではないか。当地区の海岸寄りの方には電話連絡ができたが、この方たちは台風のときには暴風のため、すばやく避難したようだ。
- ・漁船所有者は漁港まで下りて船上げ作業の姿が多数見られた。また、警報が発令された後に沖出しの漁船が1艘あった。

■中井地区

- ・当地区においては家が海から遠いので、浜に近づかないように浜の係に電話して浜に行かないように言った。

■小原木地区

- ・当地区の家屋は、比較的海岸より高い位置に建っているので、災害対応はゆったりしている。

■津谷地区

- ・11月5日、午前8時から9時まで、地区独自で避難・安否訓練を実施した。その成果があり東日本大震災で被災した地区や低い場所に住んでいる住民が積極的に行動したと思われる。
- ・地域で決めている避難場所に誰か避難しているかとも思い、行ってみたら隣の地区の会長がセンターで待機していた。「誰もこなかったです」と話し、お互いに安心した。学校も休みとなり、不思議に車のおりがなく、皆さんは外出を控え自宅におられたようだ。

■大谷地区

- ・海に近いところに民家がなくなったので、避難者はいなかった。念のためコミュニティセンターは開放した。
- ・高台居住世帯のため避難行動はなかった。

② 避難場所・避難所関係

■気仙沼地区

- ・どのタイミングで避難所を開設したら良いのか。地震が発生すると住民は特に川に近い方々はすぐに避難するのではないか。
- ・指定避難所でありながら2階にはテレビ、ラジオがなく情報を得るには心細い環境で高齢者や乳児を抱えた母親が休める場もなく気の毒だった。厚みのある敷きマット等が用意されていると助かる。避難所の開設・運営は住民、副会長、防災指導員2名の計4名ではじめ行われたが、行政又は関係機関から情報提供や連絡がなく時間の経過とともに危機意識が薄れていくのが感じられた。
- ・高台のため避難する人があった場合、避難する集会場がない。

■鹿折地区

- ・避難場所、駐車場の設置。テレビ放送で40年以内にまた来るから早目に用意してください。鹿折の場合、線路の西側につくるべきである

■大島地区

- ・避難しなくても今いる場所が安全と思われた。

■中井地区

- ・今回は注意報から警報に変わった時点で避難所の鍵を開けたが、注意報の時点から避難所に来た人もいたとの情報もあり、「どの時点で開設すべきか」という課題が残った。次の自治会役員会でどうすべきか話し合いたいと思う。

■小泉地区

- ・住民が浸水域から高台に住んでいるため、津波の場合、無理に避難しなくても良いと思う。

■無記名

- ・避難所より自宅の方が安全。無理して避難することはない。消防の屯所にテレビを。

③ 情報伝達関係

■気仙沼地区

- ・テレビの情報は気仙沼市の水位の放送がなかった。
- ・防災無線が聞きづらくエリアメールやテレビ等で情報を入手したが耳が聞こえづらくなっている高齢者に声掛けをするのが大変だった。サイレンが2種類だったが、どのサイレンが何を意味しているのか忘れてしまった。訓練ではサイレンの種類も地区全体で何度か話題に乗せた方がよいと思った。
- ・防災無線に危機感がなかった。防災無線が聞き取りにくかった。

■面瀬地区

- ・1回目の報道（テレビ）で津波警報があって緊迫感がなく避難しなかったようだ

■階上地区

- ・気仙沼の潮位変化の発表が遅い。

■大島地区

- ・津波の高さの発表が市としてあったのか。今回のアンケートで45センチあったと初めてわかった。
- ・緊急速報がスマホで何度か来てありがたいが、電池が不足するのではないかと心配で、停電にならないから充電できたが、停電になり、あの5年9か月前の状況だったら電話が使えなくなる。

■中井地区

- ・当地区の避難所は、防災無線、テレビ等で避難所として放送ならず、住民も、とまどったところがあった。市の危機管理課に電話入れるも難しいところあり、地区での話し合いが必要だと思った。集会所も、避難所として放送があっても良かったのではと話し合った。

■津谷地区

- ・津波の情報は、携帯電話、テレビやラジオ、防災無線でと様々な情報が一挙に出てくる。そうすると、それらが騒げば騒ぐほど何か大丈夫だろうという安心感が出てくるから不思議だ。津波注意報、津波警報とレベルが違うが「逃げろ」という言葉に勝るものはないと思う。
- ・テレビで津波警報を知り、しばらくして防災無線で津波警報が知らされていた。いつも「何を今頃」と思っている。もう少し迅速に放送できないものか。気象庁と放送局、気象庁と自治体では伝達方法に差があるのか。